

注記：本論考は日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

## 「長い 20 世紀」の視点から見た日本外交

中西寛

(京都大学教授)

2024 年 2 月 19 日、日本国際問題研究所の大会議室にて、中西寛・京都大学教授を報告者に招いて、第 8 回日本政治外交史研究会が開催された。

本報告は、1890 年以降の日本外交の軌跡を世界史的文脈の中で検討するものである。かつて英国の歴史家 E. ホブズボームは、1914～1991 年を「短い 20 世紀」と呼んだ。それに対して本報告では、「長い 20 世紀」という視点から、① 1890～1925 年を「形成期」（地球的一体化と反動）、② 1925～1955 年を「構築期」（地球規模の工業国家国際秩序）、③ 1955～1980 年を「変容期」（グローバル社会の浮上）、④ 1980～2010 年を「終焉期」（工業国家秩序の衰退）と捉える時期区分が提示された。

その上で、「長い 20 世紀」を論じる際の 3 つの「モラル」が示された。第一に、西洋近代の特殊性・進歩性に否定的な見方をする「反進歩主義史観」である。第二に、20 世紀の「大戦争」（第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦）を時代の画期ではなく長期的な構造変動過程における現象として位置づける。第三に、政治外交史と社会経済史、思想文化・科学技術史の組み合わせの重要性である。

次に、上記の時期区分に従って、1890 年以降の日本外交が検討された。第一に、1890～1925 年は、日本が東アジアにおける国民国家帝国（nation-state empire）となった過程であった。第二に、1925～1955 年は、日本がグローバルな大国秩序の中で脱帝国化（純粋な国民国家化）する過程であった。第三に、1955～1980 年は、冷戦構造を前提として日本が吉田路線を進めた時代である。そして第四に、1980～2010 年には、脱冷戦秩序が形成される中で、日本は経済的優越を喪失することとなった時代である。1995 年のいわゆる「ナイ・イニシアティブ」以降は対米バンドワゴンが主流となったが、「世界の警察官」としての米国の役割が後退したことを受けて、2010 年ごろには「自立化」の端緒が見られるようになった。

最後にまとめとして、① 19 世紀的学問体系の遺産としての政治外交史と歴史学／社会科学の区分を克服する必要性、② グローバルリゼーションの起点を 19 世紀末に見出して、明治維新が西洋近代化の出発点とする見方を再考する必要性、③ 近代主義的普遍主義ではなく、人間社会の普遍性の中で日本社会を特徴づける必要性が指摘された。

(作成：日本国際問題研究所 領土・歴史センター)